

別冊 河一屋のこと。

第1版第1刷発行 2020年1月15日

文章

花岡恵梨子
河野今朝成
河野智成

デザイン

相澤デザイン室

発行

株式会社 **河一屋**

〒389-2502 長野県下高井郡野沢温泉村大字豊郷 8923-1
TEL. 0269-85-4126 (代表)
Mail info@nozawa.tv

本誌記事および写真の無断転載・複写を禁じます。

はじめに…

河野一郎という方がおりました。江戸時代初期から続く、野沢温泉の伝統工芸あけび鶴細工の卸を生業とし、鳩車という玩具や、籠などを行商に歩いたそうです。そう、河一屋のルーツとなった方です。わたしの曾祖父にあたります。スキー場や温泉を利用した観光が業として栄え、その後、祖父母が河一屋を開宿しました。当時はまだ間貸しに近い様子だったのではないのでしょうか。それとは別に、先代（父）は昭和45年、有限会社白隆舎という名のリネン類を扱うクリーニング業を創業致しましたが、観光業が隆盛を極めるなか、徐々に旅館業一本に事業がシフトしていきます。株式会社河一屋に商号を変えたのは、今から6年前（平成25年）の春です。たくさんのご支援をいただきながら、ちょうど今年、創立50周年の節目の年を迎えます。皆様のご愛顧に心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。

生まれも育ちも、野沢温泉村のわたしにとって、朝起きて、すぐにスキーに行く。夕飯前に友人と外湯を巡る。学校帰りに知らない大人から、お帰りと声をかけられる。そんな、いまなお息づく古き良き日本の生活に、なんの不安や不満もなく、地域の恩恵にどっぷりとあずかつて育ちました。郷土愛。地域を愛することは、すべからず人間が抱く自然な感情なのでしょう。観光業は、その愛する地を多くの方に共有できる素敵な産業です。

わたしが前職から、実家である河一屋に働くようになり、早7年が経とうとしています。代表取締役である兄とともに兄弟経営に乗り出した当時は、時代の変遷に亡き先代と、事業承継で激しく採めたことや、老朽化する施設に、恥ずかしさを感じていたこと。なかなか思うように舵がとれず、絶望を感じたり、思い出すことも憚られる、さまざまな苦い経験や思いがありますが、少しずつ、少しずつ、お客さまや、地域に認められる企業に成長してまいりました。いまは、この会社や、仕事、そして、毎日ともに働く仲間たちに誇りをもっています。

わたしたち兄弟の夢は、スタッフ一人ひとりの夢が河一屋で働くことを通じて醸成されることです。誰に笑われようが、これが本心です。まだまだ経営者として未熟な故、スタッフから「違うことしているじゃないか」と叱られようが、その芯は「ミミリたりともブレていない」。

「別冊 河一屋のこと。」に、わたしたちの会社を赤裸々に綴りました。まだまだ道半ばの会社ではありますが、この本に共感なさってくださいる方と、共に働ける機会が訪れることを願ってやみません。



令和2年1月15日 取締役専務 河野智成

- 01 はじめに… 取締役専務 河野智成
- 03 河一屋の風景
- 05 野沢温泉での暮らし
- 09 生活と仕事 写真 飯塚久留美
- 11 生活と仕事 写真 河野孝幸
- 13 これからのこと 代表取締役 河野今朝成
- 18 会社案内
- 20 あれやこれや
- 22 採用メッセージ 募集要項

河一屋の風景

大切にしていること。

旅館と聞いて、どんな仕事を思い浮かべるだろう。もしかしたら「おもてなし」という言葉を真っ先に思い浮かべる人も多いかもしれない。しかし、お馴染みのように使われるこの言葉ほど、奥が深く、難しいことはないのではないかと思う。

言ってしまうは接客業。しかし、そのカテゴリーでひとくくりにされるのには、少し違和感がある。レストランやその他もろもろの小売業がいれば接客の王道で、旅館とはなんだか雰囲気が違う。日常の延長線上にあるそれとは違い、旅館に泊まる方の多くは非日常を求めている。特別な記念日、大切な友人や家族との思い出作り…。日本人が年間に旅行する回数は、平均すると人当たり約1.5回と言われている。その少ない機会に、この場所、この旅館を選んできたあなたお客様さまに、心からの「おもてなし」を。

河一屋旅館では、「おもてなし」を、お客様さまに「大切にされた」と感じていただくことと定義している。



わたしたちにとっても、お客様と接する時間は特別で輝く時間なのだ。

わたしたちのこと。

性格やバックグラウンドが全く違う人たちが一緒に働いている。価値観の違いや互いにかみ合わないことで、時には衝突してしまうこともある。しかし、自分と違う価値観を否定するのではなく、むしろ認め合い共存する。それがそが組織の理想的な在り方ではないか。なぜなら私たちはともに会社を作っていく「チーム」なのだから。

ダメなところ探しではなく、いいところ探し。
十人十色。
みんな違ってみんないい。

河一屋はたぶん、それを実践している会社だ。若いスタッフが多し、個性豊かで色々な人たちがいる。好きなことや強み、苦手なこともさまざま。突然現れて場の空気をパツと明るくする肝っ玉母ちゃんみたいな人もいれば、物静かなタイプだけれど陰からしっかりサポートする縁の下の力持ちもいる。外見からは想像もつかない趣味をもっていたり、熱い想いを秘めていることもある。人種不同的な環境で、たくさんの人と関わりながら生きていくこと。それが人生の醍醐味でもあり、河一屋で働くことのひとつの面白さなのかなと思う。必ずしも接客が得意な人たちはばかりではないけれど、それでも今日も自分なりの誠意と誇りを胸に、お客様の前に立つ。それが、河一屋らしさだと思う。



わたしたちには、肅々とそれを達成する責務がある。「長旅お疲れさまでした」、「河一屋旅館をお選びいただきありがとうございます」、「当館での滞在が、どうか旅の思い出を彩る時間になりますように」。わたしたちはその思いを軸に、日々仕事に臨んでいる。

旅館の仕事は「人の気持ちに寄り添うこと」でもある。それはつまり、真に相手を思いやれているかということ。「おもてなし」につながる大切な心構え。例えば、旅館で働いていれるいろいろな局面に遭遇することがある。お客様さまの機微を察し、何を求めているのか、あるいは、その一言が何を意味するのか瞬時に解釈し、+αの行動をしなければいけない。想像力を働かせ、お客様さまの「満足」を「感動」へと昇華する。その連続である。旅館で働くことは、決して「概には言えない奥深さが潜んでいる」。

「誰かの幸せを願える人生って豊かじゃない？」
ある人が言った。その通りだと思ふ。お客様さまの幸せを共に喜べる。これはまさに旅館で働くことの真髄――。

仕事の「こと」。

当館には、総務、フロント、サービス、板場の4つのチームがある。総務は、サイト運営から、スタッフの労務や給与管理、会社の予実管理。フロントは、チェックイン・チェックアウトの対応。サービスは、ご夕食とご朝食のアテンド。板場は、言わずもがな料理をつくる。

ただ、これはあくまで、お客様さまと対峙した時など、主要な業務に過ぎない。つまり、お客様さまを迎え入れ



る15時から、お見送りする翌日10時までの仕事。それ以外のほとんどの時間は、朝早くから出勤し、トイレ掃除や、客室清掃、食器洗い、リネン運び、風呂掃除、残飯処理、名もなき作業を延々とすることもある。わたしたちの毎日は、「目まぐるしく」、「単純で」、「同じこと」の業務のうえに成り立っている。

そして、わたしたちは限られた時間を割き、常に頭を悩ませ、話し合いを重ねてきたことがある。それは、「地域の魅力を発信する」という使命。

地元の自然や、文化、社会に深く関わる旅館業だからこそ、当たり前前のルーティンにしてきた。チームごとに立場や役割は微妙に異なるけれど、基本的なタスクは変わらない。例えば、「明日お見えになる柿本さまの、観光情報を予め下調べしておこう」、「新田さまの温玉の件、忘れないように!」、「今田さまからXmasカードが届いたこと、全スタッフで共有しよう」、「片塩さんのブルーベリー畑が旬を迎えた、お客様さまにご提供しよう」、「明日は吹雪になりそう、早めにスノーモンキーをお客様さまにご提案した方がいいかも」、「こんなことを毎日、チームごとに自問自答している感じ」。

一人ひとりが、お客様さまに接することのできる時間は、1日30分と満たない。つまり、残りの7時間をこえる勤務時間は、準備と心構えの時間に費やしている。だから、

【日々】

朝、起きて山々を見上げれば四季折々の自然が“季節”を告げ、
仕事帰りの小道では、木立が嬉々として揺らぎ、“時刻”を教えてくれる。
短い夏と、長い冬。
太陽の明るさや温かさ、空気の透明度。
いまこの時間が肌で解る感覚。
それほどに、野沢温泉での生活は、自然と共に営まれている。
坂道を椅子がわりに腰掛ける。
複雑な街並みでかくれんぼが当たり前の世界。
仕事帰りの外湯も定番。
そういうカタチに村ができています。



【人】

ひとり < みんなでガヤガヤ
ジュース < 酒とビール
レストラン < 居酒屋
うどん < そば
革靴 < 便所スリッパ
夏 < 冬
IN TIME < ON TIME
仲間 < 仲間

…ここで暮らす人たちの性質。



【祭】

野沢温泉には村をあげての二大行事がある。
秋の湯澤神社例祭と冬の道祖神祭り。
祭りの主役は数え年で42歳と25歳の本厄にあたる村の男衆。
そして、同級生の女衆が支え役。
地元の高校を卒業し、一度は疎遠となった対照的な人生も、
心の奥にあるこの村に生まれた誇りを胸に、ほぼ全員が再集結する。
そして、何百年も続く伝統という重責と戦う。
酒をたらふく飲み、時にはケンカをして、
眠れない夜を共有しながらも村の矜持を脈々と受け継いでいる。



【この場所】

信州の北東部、通称、奥信濃に位置する野沢温泉村。
眼前に広がる北信五岳一。
威風堂々たる千曲川一。
観光地たる風光明媚は当たり前には備えている。

日本で唯一、「温泉」がつく野沢温泉村は、
開湯700年以上の歴史をもつ。
50ヵ所を超える源泉が自噴している村内には
13の外湯(共同浴場)があり、
古くから村人たちの共有財産とされ、
「湯仲間」という制度で
大切に守り継がれてきた。
外湯は入浴だけでなく、
洗濯場や台所の役割も果たし、
今なお村民たちの生活と
深く結びついている。



野沢菜発祥の地としても知られる。
江戸時代に野沢温泉の古刹、健命寺の住職が、
京都から持ち帰った蕪の種から、
その歴史が始まったという。



野沢温泉の代名詞とも言えるスキー場。
国内最大級のビッグエリアに、全36のコース。
最長滑走距離は、10,000mにもおよぶ。
人工降雪機を備えるスキー場も多いなか、
あえて天然雪100%にこだわる。



野沢温泉での暮らし



プロフィール
入社6年目
地元の農林高校から河一屋へ
サービスチーム所属（フロントチームより1年前に配属）
飯山市常盤出身（野沢温泉から車で15分）
人呼んで「河屋の癒し系」
中学・高校ともに美術部 水彩画と色鉛筆画が得意
趣味・ゲームとお絵かき
休みの日の過ごし方：ミニや原付でツーリング、
レトロなものを探索する

生活と仕事 File 1

飯塚 久留美

いじつかるみ



きっかけ

地元で働きたいと思って就職活動をしていたときに、進路指導の先生に勧められたのがきっかけ。その後、縁あって河一屋に入社。旅館に入った理由は、人見知りを克服したいというのもあったけど、地域の魅力を発信する仕事があったから。私の地元は、飯山市の常盤（ときわ）っていう、市街地よりもずっと野沢寄りがある田舎。あたり一面田んぼしかない（笑。そんな地元には、小沼帯（おぬまぼうき）や常盤牛蒡（ときわぼごう）みたいに、昔ながらのいいものがあるから、そういうのがもっと全国的に広まればいいなあって思っていた。

あと、先生から河一屋はいろんなことにチャレンジし



もあるよ。例えば、秋だと紅葉はどこが見頃だったか聞いて、それを参考に実際に自分で行ってみたいもする。その方が、生きた情報をお客さまに紹介できるから。それも仕事の一部だし、この仕事が好きと思う理由はそういうところにもある。

また、野沢温泉は冬になると、お客さまの目的はほぼ100%スキーになる。一気に海外のお客さまも増える。実は私は高校を卒業するまで、外国の方と話したことがなかったから、まずそのことに戸惑った。みんなとてもフランクでびっくり。いろいろと話してくれるけど、理解できなくてもどかさかしたな。日本の常識が通用しない、ということも思い知った。量の上を普通はスリッパで歩いたりするのもそう。日本の当たり前は世界の当たり前ではないから、対応の仕方も変えていかなくちゃいけないんだって。

ている会社だと聞いて、自分の成長につながる環境だと思った。実際に会社見学に行ったときも、働いている人たちがみんな楽しそうだったことが印象的。

野沢温泉の印象

野沢温泉には小さいころ祖父母に連れられて、温泉に入りに来たことがあるよ。でも近かったのに、実はそんなに来たことがなかった。大人になって改めて、地元の人が居酒屋で、ワイワイガヤガヤ飲んでる光景は新鮮だった。旅先で良さげな居酒屋を見つけて入ることはあっても、日常的に飲みに行くことってそんなにない。この人たちは、仲間で飲むのにつかう行きつけの店を、みんな数軒は持っている感じ。暮らして密接したお店が多いということ。

好きなこと

昔から、ゲームが大好き。よくファミコンとかゲームボーイで遊んでいたよ。ファミコンのカセットもたくさん持っていたよ。あとは、クラシックなものが好きで、なかでも、古い車に乗るのは念願だった。いま乗っているミニ（クーパー）と出会ったのは2018年の9月。廃車寸前で、部品がいろいろ足りてない状態だったけど、一目見て「乗るしかない」って。旅行も好き。ミニに乗って一番遠くまで行ったのは静岡かな。全国からミニが集まってくるイベントがあったんだよね。まさに夢の空間、最高だった（笑）

お酒は好きでよく飲むけど、特に梅酒が好物。板場の大日方くんが梅酒を漬けているのを見て、いつか自分でも作ってみたいと思うほど。あとはクラフトビールも好き。製法が変わるだけで味も違うし、奥が深い。最近全国一位になった、「信州須坂ブルーツール（りんご・カシスミックス）」※も飲んでみたいなあ。河一屋でも提供している志賀高原ビールの Miyama Abronde みたいに米を加えているものもあるしね。クラフトビールはそうやって製法を少しずつ変えて、オリジナリティーを出す。1年ぐらい前にサービスチームに配属されて、フロントにいたころとは



じゅうたんが見えるんだ。

ワクワクする仕事

仕事を楽しめるようになったのは、2年目に入ってから。その頃からお客さまといろいろな話ができるようになった。入社1年目の夏に電話応対を練習して、その成果もあって秋ごろから徐々に仕事に慣れてきた。でも、お客さまとちゃんと意思疎通ができるようになったと感じたのは、冬頃かな。お盆の時期は、忙しくて会話を楽しむ余裕がなかった。でもやっぱり、旅館の仕事は、いろんな人とワクワクする話ができるから楽しい。こちらから「どちらに行ってくださいか」と尋ねると、お客さまもその方が話しやすいから色々教えてくれる。リピーターの方から、情報を頂くこと

また勝手が違うけど、今は仕事しながら大好きなお酒の知識を深められて楽しい。
※2019年秋
季全国酒類コンクール
の地ビール部門1位



20年目の今更け

旅館で働きはじめてから、いろいろな情報が入ってくるようになって、積極的に外に出るようになった。それが一番大きな変化かな。それまでは割と一人でゲームに没頭しているようなタイプだった。気になったところは自分で調べて、実際に行ってみる。河一屋に入ってからというスタイルができた。フロントにいた頃は今よりもっと、お客さまから観光情報とかよく聞けたしね。初めての就職だったけど、一緒に仕事をする人の個性が色々面白。みんな自分なりの生き方をしていくから、人生の勉強にもなる。家族との時間を大切にしたいから地元に戻ってきた人もいるし、それぞれちゃんと目的をもって河一屋に入ってきているんだなって。

いままでの旅館のイメージは、かしまって身なりをしつかり整えて、マニュアル通り、迅速な対応を常になければならないものだと思ってたけど、5年働いてそれは違うと分かった。ロボットみたいに機能的にこなすのではなくて、お客さまとの会話を大事にしたい。

生活と仕事

File 2

河野孝幸

こうのたかゆき



プロフィール
入社4年目
野沢温泉村出身。3年前に東京からUターン
板場チーム所属
人呼んで「厨房のダークホース」
2人の娘を溺愛中
学生時代は野球部
三夜講※習優会、祭礼副委員長及びほか長
趣味・DIYとアニメ鑑賞
休みの日の過ごし方：アマゾンプライムビデオを見る
※男の厄年に当たる42歳41歳40歳で結成する
お祭り組織のこと。同じ仲間と3年間行事を執行する

上京する前と後

19歳のとき、高校卒業してすぐ長野の調理師専門学校に入った。最初は包丁一本でも何でもできる中華料理を希望していたけれど、先生の勧めで日本料理の道に方向転換したんだよね。見た目にあまりこだわらない中華と違って、日本料理はとても繊細で、見た目の美しさも重要。それが日本料理の難しいところでもあり魅力だと思った。調理師免許を取得して卒業後の4年間は、長野のホテルに勤めたよ。

25歳の厄年に道祖神祭りに参加して、そのあと修行のため東京に出た。東京での仕事はとにかく過酷だった。みんなが、まるで地方の4年分の仕事を1年間でこなしているようだったし、毎日4時間たらずの睡眠が当たり前の環境だった。東京で最初に入ったホテルでは、厨房スタッフが1000人の規模で、和食だけでも板前は50人くらいいたかな。でもホテルによるだろうけど、出来合いを使うっていう風潮に少し違和感を覚えていた。自分は「から手作り」で調理に向き合いたかったから、転職を考え込んだ。



に戻るなら、入園する前の方が子どもにとっても幸せかなって。それに自分自身が野沢で得た仲間との絆を、自分の子にも経験してもらいたかった。野沢温泉は四方を山に囲まれた自然豊かな場所だから、遊び場所には困らないしね。自然から学ぶことも多い。

あとは何と言ってもスキー場が近いこと。保育園の頃からとても熱心にスキー教育を受けたから、「オリンピック選手輩出率が日本一の村」っていうのにも頷ける。なんせ、冬になると、体育とはべつに「スキーの授業」があるくらいだから。午後はまるまるスキーの時間で、現地集合・現地解散みたいなのが当たり前だった。それは、自分の子どもも世代になっても同じで、野沢に続くひとつの風習・文化だと思っ。そのくらい自分たちにとってスキーは、今も昔も身近な存在。

そして、言わずもがな源泉が豊富な温泉地だし、空気が澄んでいるから水もうまい。これはもう都会とは比べ物にならない。「パウダースノー」は、そんな野沢の自然環境の賜物だよ。雪の粒子を手にとってよく観察すると、きめが細かくきれいな結晶になっている



29歳の時に始めたのが、都内にくっつかチェーンをもつ個室会席の店。赤坂にはじまり、都内各地で働いたよ。店によって個性があって面白かったな。客層も違うし。ちなみにこの店で働き始めたその年に結婚した(笑)。寝る時間はこちらでも常になくて、終電帰りの日々。会社に寝泊まりすることもあったし。当時、休みは月4日程度しかなかったから、子どもが産まれた後も、起きている顔を見られるのは休みの日だけで、子どもや妻に、申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。

そんな状況だったけど、大きかったのはフグの調理師免許を取得できたこと。品川の店舗に異動になったときかな。フグを扱う店で2年以上勤めないと取れない資格で、実は東京での試験が一番難しい。なぜなら東京で取得した免許は、全国で使えるけど、地方で取得したものは、その都道府県でしか使えないから。その分、東京での試験はハードルが高いというわけ。まあそんなこんなで東京では約10年間働いて、36歳の時、生まれ故郷である野沢温泉に戻ったんだ。

地元へ戻る

その理由はいくつもあるけれど、まず一つ目は道祖神祭りがあるから。野沢温泉に生まれたからには参加したいという気持ちが強かった。保育園から中学校までの12年間、共に過ごした同級生たちと一緒に作り上げていく祭りだから、自然と気合も入った。これも野沢特有のお祭り魂というか、仲間意識に由来するものだと思う。ずっと一緒に育ってきたから、自然と絆が生まれたし、ともに過ごす時間が長くなればなるほどその結びつきが強く、太くなるのを感じた。だから

ことがわかるよ。

河一屋に入って

河一屋で働こうと思ったのは、社長との面接で話を聞いて、会社の思いや、働く環境、経営の方針に共感したから。

野沢に戻ってきて一番の変化は、休みの日の使い方がな。東京にいた頃は休日でも疲れて寝ていることが多かったけど、今は家族との時間に使えるようになった。以前は通勤に往復3時間かかっていたけど、今はなんと徒歩1分で着く距離に会社がある。休憩時間も家に戻って下の子とも遊べるから、まさに理想的な環境だよ。

あと、仕事に関しては、いいなと思ったアイデアとか、外で見て学んできたことを積極的に取り入れている。例えば、クリスマス限定のイベントメニューに挑戦したりするのもそう。勤務時間も整備されているから、子どもを保育園に送り届けた後から出勤できる。野沢の人ってみんな仕事着のまま送り迎えもするから、その方が何かと都合がいい。

今は地元の方に振る舞うメニューも考えているよ。県外から来るお客さまとは求めるものが違うから、専用のメニュー。「海の幸」目当てで野沢に来るお客さまはまずいないけど、奥信濃の山奥にあるこの場所で暮らしていると、ときには海鮮を食べたいと思うことも多いはず。とは言っても、新鮮な食材をどう仕入れるか、難しいところではあるけど。たまに日帰りで地元の人から夕食の予約が入ることがあるでしょう。そういう時は、通常のメニューと少し変えて、「ご満足いただけているか分析するようにしている。」

こそ、彼らとまた一致団結して、この一大行事を成功させたいって思った。



そのこともあって、改めて感じたのは、野沢の付き合いはやっぱりいいということ。大人になっても、年齢問わず人と人が絆を深められる機会って本当に貴重だと思っ。東京にいたころは職場の同僚とたまに飲みに行く程度だったから。地元の人たちはみんなお祭り気質だし、集まってワイワイガヤガヤ飲んだりしゃべったりするのが元から好きな人たちだから。こんなに祭りというか、宴が多い村って、多分そうないんじゃないかなあ。道祖神の唄の歌詞にある「サアては友達良いもんだ」って、まさに野沢の人の性質を表しているよね。

2つ目の理由は家族。東京だと待機児童が多く、子どもが幼稚園に入るのが困難だったし、どうせ地元

これからのこと

このような想像をするとワクワクしてしまう。

社員のみんな、村の大人や子供たち、そして地域の商店。

かれらが毎日を笑顔で楽しく暮らしている。

ときにはトラブルや大変な事態もあるだろう。

でも、すぐに笑い話に転じてしまう。

そんな幸せな地域であるからこそ、訪れるお客様もまた幸せになる。

そしてこの暮らしが未来永劫、千年と続いている…。

こんな途方もない、空想に過ぎない夢物語を本気で想う会社があってもいい。

その夢に向かって…。

会社の組織は、今ある「河一屋旅館」、「R1177トラベル」、「ひと呼吸」、そして「なっぱコンサル」を独立した会社へ。

そのほか社員のみんな考えていく新しい事業も会社化。

そのうえで現在の株式会社河一屋はいわゆるホールディングスへと進化。

当社の使命は、所属する各業界の質や技術レベルを向上していくことと悟り、

自社のみならず地域への相乗効果や相補効果を見出す。

この名譽ある役割こそが、当社の目的であり、当社が考える社会貢献だ。

そして、この、ホールディングスへの進化には、

河一屋グループとして社長が複数名存在することになる。

社長とはいえカリスマ的人材は不要であって、生え抜きの社員達が社長となり奮闘する。

そのため人材育成には手を抜いていない。

社員は自律したチームであって自由闊達な職場を創造。

常にチャレンジと失敗を繰り返し、

責任ある意思決定をしたからこそ他者を認め、笑顔が絶えない。

そんな社風の河一屋グループを目指していきたい。

そしてチーム河一屋は、小さな組織であっても、

「未来永劫存続する幸せ溢れた地域」のリーダー企業として、千年企業へと歩んでいく…。

私は、「大いなる責任には、大いなるやりがいがある」と信じている。

責任とやりがいに溢れる時間は、社員みんなを精神的に成長させ、

人間力を育み、幸せな人生である気付きとなる。

そうなることを心から願い、夢に見、私はもう、ワクワクしてしまっている。

河野今朝成

このけさなり

株式会社河一屋 社長

野沢温泉村出身

東京サラリーマンを経て17年前に舞い戻る

両親の宿を手伝い、7年前に社長に就任

人呼んで野沢の未来を背負って立つ男

3人の子をもつ父

お気に入りの外湯は上寺湯

学生時代はスキー部に所属

趣味・気の合う仲間との飲み会と勉強

休みの日の過ごし方…家族とお出かけ





観光産業は地域固有の伝統や、文化、歴史、産業、自然などの資源と密接に関係し、それらの保全に留まらず、新しい魅力を「創出」していく産業です。当社企業理念に則り、私たちの本拠地であるこの「奥信濃」の未来に、「観光」をキーワードとした4つの事業部を主軸とし営業いたします。

会社概要

社名 株式会社河一屋 / Kawaichiya CO., LTD.
 会社沿革 昭和45年4月 株式会社河一屋の前身である有限会社白蔭舎の設立
 平成25年6月 株式会社河一屋へ社名変更
 平成25年6月 旅館事業部、旅行事業部、物品販売事業部の3事業部体制となる
 平成26年6月 長野県知事登録旅行業 第3-552号 取得
 平成27年8月 一般酒類小売業免許および通信販売種類小売業免許 取得
 令和元年7月 長野県知事宅地建物取引業者免許 第5619号 取得
 所在地 〒389-2502 長野県下高井郡沢温泉村大字豊郷8923-1
 資本金 10,000,000円
 事業内容 旅館業、旅行業、物品販売業、コンサルティング業
 代表者 河野今朝成



株式会社河一屋は、SDGsの内容を理解し、SDGs達成に向けた方針及び取組を下記のとおり宣言します。

SDGs達成に向けた経営方針等

当社は、企業理念「わたしたちは 社員の笑顔 お客様の感動 地域の発展を目指します」のもと、社員一人ひとりが輝く企業を目指しています。これは、SDGsの目指す持続可能な社会の実現に通じることから、社員一人ひとりが企業理念を理解し、それぞれの役割を果たしていくことで、SDGsの達成に貢献していきます。

SDGs達成に向けた重点的な取組	2030年に向けた指標
●地域の伝統・資源を活用した事業展開	伝統工芸品と体験プログラムの販売を倍増
●エネルギー使用量の削減	電気・ガス・灯油・水道使用量15%削減
●経営支援を目的とした研修の実施	経営支援研修の実施を倍増

旅館事業部 河一屋旅館

2種の源泉と信州産の食材を生かした郷土料理。そして、スタッフの「おもてなし」が好評です。奥信濃の旅の起点として、多くのお客さまにご利用いただいています。

施設概要 ■客室数/20室 ■収容人員/50名 ■温泉浴室/湯処[湯楽] 露天風呂 天下の名湯「真湯」 内湯 天然記念物「麻釜」 ■お食事処/食事処[団楽] ■駐車場/18台



物品販売事業部



奥信濃の商品(食品、酒、工芸品等)を旅館内の売店、並びにインターネットで販売しています。日頃から地域の方々が、贈り物として扱う品など、奥信濃らしい商品を取り扱っています。



旅行事業部

奥信濃の「旅」を提供する旅行会社「R117トラベル」です。旅を思い立った瞬間から、出発の当日までを、しっかりワクワクしてもらいたい!地元でしか知り得ない、地元の人々が楽しんでいる文化をご案内しています。登録番号 長野県知事登録旅行業 第3-552号



コンサルティング事業部



令和元年からスタートした新事業部です。不動産のほか、MG、TOC、戦略BASiCS、TOEIC bridgeのセミナー等を開催しています。免許証番号 長野県知事(1)第5619号



あれやこれや

【毎日の朝礼】

私たちは、「朝礼」を大切にしている。旅館業は、所属する部署によって出勤時間が異なる。朝礼がなかったころは、出社しながらも、一日中顔を合わせないことすらあった。遠くからお越しいただく、「今日のお客さま」の準備をする。「心からの笑顔」のために、「心」を整える。チームだからこそ、仲間の顔をうかがう。毎日10分間の共同作業。



【学ぶということ】

マネジメントゲーム研修に始まり、TOEIC Bridge研修。前期後期の全体研修。管理職研修。防災救命講習。コンプライアンス研修。衛生管理講習。新人研修。河一屋おもてなし検定。社外からひとをお招きする研修も含めて、年間学ぶことだらけ。「学んだことの証しは、ただ一つで、何かがかかわることである。」林竹二『学ぶということ』より
学びを通じて、これまでの自分より成長した実感を得る機会をできるだけ多くもつことの幸せを感じて欲しい。

【AシフトとBシフト】

旅館ではご夕食つきプランでお申し込みのお客が多い。通常であれば、ご朝食の準備が始まる早朝に出勤。アテンド、ご精算、お見送り、お掃除とお昼頃まで業務にあたり、いったん休憩。夕方、再度出勤し、ご夕食の準備からお迎え、ご夕食のアテンド、片づけと朝食のセットをして終業となる。いわゆる中抜けシフトが業界ではいまだに主流。拘束時間がむやみに長い。5年ほど前から、シフト改革に乗りだした。理念に謳う「社員の笑顔が広がる環境」を創り出さないと、お客

さまへの満足はおろか、感動なんてイメージも、コミットも難しいから。そのために、スタッフに理解をもとめ、機器やシステムに投資し、5分刻みに業務を見直し、現在の二交代制。早番のAシフトと遅番のBシフトにたどり着いた。スタッフのプライベートも充実した会社にしたい—その一心で。

【ありがとう≒あんと】

感動した景色や出来事、感謝していることは、「あんとカード」に綴り、全員に共有することになっている。その程度によって、ランク付けをする。ちとくたまえたくえっくげとくやれこまる
ひとの感動は、知っていて損はないし、面と向かって言えない「あんと」も、このシステムを通してなら伝えられる。仲間の心が動くシーンを知ること、伝えることも貴重な時間だ。「あんと」は正確には信州の方言ではないらしいが、幼少の頃よりみんな使ってきた言葉。パパ、ママではなくて、おとうちゃん、おかあちゃん。やっぱり「ありがとう」ではなく「あんと」の方がしっくりくる。



【イベント企画部】

若い衆で構成される「イベント企画部」。主に会社の潤滑油の役をかってでてくれる。「集印巡り」をグレードアップさせた「河一屋カップ」や、マレットゴルフ大会などのレクリエーションの企画。そして、日々の疲れを労う飲み会も主催。「飲みニケーション」が薄れていく現代でも、カラダやココロの体操をしたあとのビールはやっぱり腑に落ちる。チームワークが大切な会社だからこそ、わたしたちにとって飲み会はいまだに大切なコミュニケーションツール。



【KEYNOTE 2019】

企業理念に基づいた、その年その年の具体的な取組方針をKEYNOTEと呼んでいる。KEYNOTE2019は以下のものであった。

企業理念	KEYNOTE2019
社員の笑顔	応援する人からされる人へ 自己目標達成のために、笑顔と感謝でたくさんの他力を集めよう。
お客様の感動	野沢リピーターをファンへ 私たちの果敢な「おせっかい」で、野沢リピーターから他力をもらおう。
地域貢献	地域をリードする企業へ 私たちが率先して業界の技術レベルを向上させる。この名誉ある役割こそ、私たちが考える地域貢献である。

企業理念
一継永志事一
わたしたちは
社員の笑顔
お客様の感動
地域の発展を目指します

- 社員の笑顔が広がる環境を創り出すことが、わたしたちの始事です。
1. お客様の「旅」を通じた感動が、わたしたちの思事です。
- 取り巻くすべての環境・文化・社会に感謝し、ともに発展することが、わたしたちの志事です。



